長比と走行型との間には概ね平行的関係があるようであるが、又この平行関係を乱す様な事実も見られた。

(金沢大・理)

米子市及び渡村に於ける蠅

石神 兼英 松本 俊夫

Ishigami, K. & Matumoto, T.:
Studies on the flies in Yonago
and Watari (Tottori Pref.)

著者等は昭和 29 年 5 月初めから同年 12 月末日に至る約 8 カ月間米子 (3 カ所) と渡 (4 カ所) において廻転式蠅取機を用い蠅の採集を行つた。採集場所は米子に於ける 2 カ所は住宅地であり、1 カ所は市の郊外で田畑に囲まれた農家の多い部落である。一方渡は米子を基点とする弓か浜半島の先端に近く位置する農村であり、採集箇所として選んだ 4 カ所の間には環境的な相違は認められない。以上の計 7 カ所で屋内に蠅取機を置いて期間中毎日採集を行つた。尚誘引剤は酢とシロップを略等量に混合したものを使用した。1) 採集した蠅の種類は 7 科 21 属 39 種の多種で主なものは *Musca d. vicina*, *Muscina stabulans*, *S. peregrina*, *F. canicularis*, *L. cuprina*, *C. grahami* であつた。2) 採集総数 62964 匹で *Musca d. vicina* 46176 (71%), *Muscina stabulans* 3999 (6.3%), *S. peregrina* 3636 (5.7%) である。興味ある事は *F. canicularis*, *L. cuprina*, *C. grahami* の 3 種は渡に比べて米子市で圧倒的に多く採集されていて地理的な差が大きく影響するものと思われる。3) 次に各種の季節的消長をみると *M.d.v.* は渡の 3 カ所では 6 月中旬を前後して消長の山が見られ酷暑期に減少するが 10 月上旬には再び山が認められた、之等の 3 カ所に於ける消長は堀氏により報告された仙合における双峰型の消長と略一致するが渡 1 カ所と米子の 2 カ所では双峰型の曲線を示さず異つた結果を得たがその原因となる様な因子も考えられず、これらの追求は今後の研究に俟ちたい。*L. porphyryna* は渡 1 においては 7 月上旬 8 月上旬に増加をみて渡 3 では 8 月上旬に最高の山を示した。*L. ampullacea* は 7 月上中旬に最高の山を示し、*L. sericata* は 8 月下旬と 9 月上旬に最高を示した。*L. illustris* は 7 月中旬に消長の山が認められ、*L. cuprina* は米子 2 に於ては 8 月下旬に米子 1 に於ては 9 月中旬に最高を示した。又 *F. canicularis* は 6 月中旬より 8 月上旬迄略同様の採集数が認められた。*S. peregrina* は 8 月上旬に最高を示し、*M. stabulans* は 7 月上旬に最高を示した。4) 性比の変遷は一定の傾向は認め難く雌の比率は堀、末永氏等の報告に於けるものと比して相当低い様である

がこれは誘引剤の差に依るものと思われる。(鳥取大・公衆衛生)

大阪市内に於ける蠅族の諸相 (続報)

田中英雄 生沢万壽夫 米本申一
杉山 博

Sugiyama, H., Tanaka, H., Ikuzawa, M. &
Yonemoto, S.: Ecological investigation
on the fly fauna in Osaka City

昨年度の学会で報告した昭和 29 年の蠅調査成績に引続いて昭和 30 年 6 月から同年 12 月に亘る間、大阪市北区一般住宅地区に於て蠅の族相に関する調査を行つた。その方法は同地区からランダムに抽出された昨年度のサンプル家屋 10 戸に於て毎週 1 回所定の期日の夕刻から翌日の夕刻に亘る間、各屋内に蠅取りボン 1 本と奈良漬粕及び魚の臓物を餌とするガラス瓶の trap 各 1 個を設置して採集を行い捕集個体群を市大医動物教室に集めて分類を行つた。確認した蠅の種類は家蠅、姫家蠅、大家蠅、金蠅、黒蠅、肉蠅、姫黒蠅等で前年度と同様であるが、奈良漬粕並びに魚臓物を餌とする trap による場合は捕集頭数の激減がみられこれは即ち金蠅、肉蠅系統の exposed population の激減を意味するものであるが、それは昭和 30 年度の場合同地区に於て調査全期間を通じ、DDT oil, ミケゾール等を便所内に撒布して駆除工作に努力を払つたことが主たる原因ではなからうかと推察される。他方、家蠅系統での捕集成績は昭和 29 年度と大差がない点注目し値する。又各捕集方法別、観察時期別に各種の捕集頭数順位について検討すると、形式的には一応、元村氏等比級数法則に適合している点、前年度の場合と同様である。又、優占種の季節的消長の様相も殆んど前年度の場合と一致している点興味がある。

尚、家蠅群の exposed population の激減にもかゝらず各捕集方法別の種間の順位が前年度の場合と大差がないのは、家蠅が元来、主として蠅取りリボンに対して expose され他の trap へは殆んど expose されないことが主たる原因であると考えられる。(大阪市大・医・医動物、大阪市大・医・推計)

〔質問〕 朝比奈正二郎氏 (予研・衛生昆虫)

餌によつて来集する雄、雌の数には差がないか。

〔答〕 杉山博氏 (大阪市大・医)

未だ結論を得てないので今後検討したい。

〔追加〕 堀克重氏 (金沢大・理)

魚の臓物を餌とした場合は比較的雌が多いが、酒粕を餌とした場合は雄が多くなる傾向がある。又樹液には比較的雄が多い様に思う。尚これはハエの種類によつて異